

特集 1 まれに会おうと悩ましい 膝・足の疾患

企画・編集：神島 保 北海道大学大学院保健科学研究院 医用生体理工学分野

新津 守 埼玉医科大学病院 放射線科

小橋由紋子 日本大学医学部 放射線医学系 放射線医学分野

序 説

日常の医療画像診断業務では、病態が理解しやすく、典型的な所見をもつ疾患の診断にはそれほど時間を要しません。しかし、見慣れない所見を呈し、病態が把握しきれない疾患の場合、教科書や文献の検索に多くの時間を費やし、結局、満足いくレポートを作成できないままに、次のレポートの作成に進まざるをえないことがよくあります。逆に、異常所見に気付かず、に十分なレポートを提供してしまう可能性もあるのです。

『臨床画像』2023年10月号の「特集1 まれに会おうと悩ましい 膝・足の疾患」では、読影時の迷いを少しでも低減し、的確な診断を支援する情報を提供することを目指しました。

この特集を編集・執筆するにあたり、私単独では不十分であることを早期に自覚し、日本骨軟部放射線研究会に所属する放射線診断専門医に助けを求めることにしました。幸いにも、膝の画像診断の第一人者である新津 守教授(埼玉医科大学病院)と、足の画像診断のエキスパートである小橋由紋子先生(日本大学)が快く協力してくださりました。お二人はそれぞれ膝と足に関する優れた教科書を執筆されています。

さらに、スポーツ医学の画像診断に詳しい高尾正一郎先生(徳島大学)、骨軟部腫瘍の画像診断に精通する常陸 真先生(東北大学病院)にも執筆を依頼しました。彼らの豊富な経験と知識が、この特集の信頼性と価値を高めたことを確信しています(常陸 真先生ご担当の「足の滑膜肉腫」の「おわりに」に貴重なメッセージが含まれていますのでぜひご一読ください)。また、「鷲足包炎に伴う骨の二次性変化」については、高橋正秀先生(国立国際医療研究センター病院)に執筆いただきました。高橋正秀先生は非常に興味深い症例をおもちであることを放射線診断専門医のSNSを介して存じ上げておりました(関連して、自治医科大学の森 壘教授が印象的なコメントをSNSに共有されていました)。

ところで、歳をとると歴史的なことに興味が湧くもので、新津 守教授が取り上げられた「Pellegrini-Stieda disease」のStieda先生と、私が「三角骨障害」で触れたStieda結節のStieda先生との異同が気になりました。新津 守教授の原稿を拝見すると、「Pellegrini-Stieda disease」のStieda先生はドイツ人外科医Alfred Stieda(1869-1945年)とあります。一方で、Stieda結節のStieda先生はLudwig Stieda(1837-1918年)で、やはりドイツ人ですが、解剖学者・人類学者だったようです。これも新津 守教授の原稿にあります。前者の発表が、Röntgen博士によるX線発見(1895年)から十数年後であったのに対し、後者の発表は1869年と、X線発見の20年以上前であったことがわかります。現在に至るまで骨軟部医学領域に名前を残す同姓の両巨人は、それぞれX線発見前後の研究者として色分けできそうです。

さて、この特集で、高尾正一郎先生(徳島大学)、松下知樹先生(徳島大学病院)らは「膝部 Morel-Lavallée病変」に焦点をあてていますが、私自身は2011年に香港でDonald Resnick教授の講義を受けるまで、この病態を知りませんでした。また、私の「三角骨障害」については、2000年にThomas Jefferson大学病院でMark Schweitzer教授から学んだことが最初でした。もちろん、すべての疾患について特別な思い出があるわけではありませんが、さまざまな人との出会いのなかで印象強く学び、日々の画像診断の実践で知識を定着・蓄積させ、それが現在の読影の糧となっています。この特集の読者にも、自身の学びや経験を充実させ、診断に活かしていただけたらと思います。

最後に、私の筆が遅く、編集作業も遅れがちであったにもかかわらず、辛抱強くお付き合いいただいた、メジカルビュー社 坂口もも子様ほか『臨床画像』編集部の皆様に深く感謝申し上げます。

神島 保